

備を備えた米英ソ軍などと比べれば劣等装備であった。中共軍隊の精銳とは、正規軍と全く様相を異にする治安戦において、即ち遊撃戦、政治戦、思想戦等多様な戦いに對し勝利を得る実力を持つことである。

中共党軍の軍事行動は、変幻出沒きわまりなく、高度の遊撃戦を展開するので、我軍もいたずらに典範令に拘泥してはならず、臨機応変、機知と実行力が不可欠である。治安戦は戦鬪行動に随伴して治安工作を実施しなければならぬ。「中共軍は強さを避けて弱きを撃つ」である。

当時の関係者は「中共軍は根強き雜草を刈りとるがごとく、蠅を追ひ払うがごとく、のれんの腕押しのごとく、まことに始末に困ったもの」「中共党軍を鼠にたとえるならば、鼠退治には力強い猛犬よりも行動敏捷な猫が必要、それよりも、鼠は繁殖する前に手を打たねばならぬ」と述べている。

中支付近の共產軍は概ね新四軍であり、蘇（江蘇省）中軍区、塩阜軍区、淮南軍区、淮海軍区、淮北軍区、蘇南軍区、皖（安徽省）中軍区の各区に編成され

ている。

軍区—軍分区—団（連隊）—營（大隊）—連（中隊）—排（小隊）と縦型指揮系統が確立されている。

党組織では、中共全国大会—中共中央執行委員會—中支地区は、蘇中区、蘇南区、蘇皖辺区、豫（河南省）、皖蘇辺区、皖中区、豫鄂（河北省）皖辺区の各党委員會で組織されている。

行政機關組織では、中共中央執行委員會のもと、中政治局があり、華中局を、前記党委員會同様、蘇中区、蘇南区、皖蘇邊区、豫皖蘇邊区、皖中区、豫鄂邊区の党委員會がおかれている。

荒漠千里

新潟県 金子 富 栄

戦争と消耗——。戦争は最大の消費者である。特に近代戦では消耗が膨大となり、補給の成否が勝敗に大きく影響したものである。

「輜重兵ノ本領ハ戦役ノ全期ニ亘リ確實迅速ニ輸送及ヒ補給ヲ実施シ以ッテ軍ノ戦捷ヲ全ツタカラシムルニ在リ」

と、輜重兵操典の冒頭にあり、戦闘と補給は戦勝のための両輪であった。

ガダルカナル戦では情況判断の甘さによる兵力の逐次投入という作戦上の失敗と、制空権の劣勢が敗因であったが、しかし補給が計画の半数でも行われていたら、戦況は大きく変わり、飢餓地獄という悲惨な結果は免れたであろう。

インパール作戦は無謀な作戦計画により多くの将兵が白骨と化して捨てられ、敗走につぐ敗走という悲惨な結果となったが、「敵さん給与」という考えが先行することなく、実情に即した確実な補給計画によっていたなら、あのような結果にはならなかったであろう。

昭和十九年、中国大陸で湘桂作戦が行われたが、これは世紀の大作戦といわれたように、出動兵力、作戦区域、期間と、大陸では今までのいずれの作戦よりも大規模のものであった。

私は第十三師団、歩兵第一百十六連隊第三大隊本部行李に所属していた。当時大隊は、湖北省の宜昌寄りの涪溪河に駐留していたが、作戦参加のためにより、荆門、麻城鋪、沙洋鎮、応城、長江阜を経て、五月一日漢水ほとりの蔡甸に到着した。この付近で十五日ほど待機の後出発し、漢陽より揚子江を渡河、武昌より粵漢公路を南下して崇陽付近に師団は集結、二十五日戦闘開始により一斉に出撃した。

しかしこの作戦は今までの作戦とは大きく様相が変わっていた。それは敵飛行機の跳梁により、昼間の行動が大きく制約されたことである。前年の昭和十八年までは敵飛行機の来襲は微々たるもので、行動には大きく支障を来すことはなかったが、米・中空軍の増強により情況が一変していた。そのために特に輸送は困難を極めた。

駄馬か小舟に頼るしかなく、自動車は昼間行動すれば敵機の格好の目標となり、夜間はライトをつけることが出来ない。ライトがなければ動くことも出来ず、補給皆無に等しい状態となっていた。

昼間馬が行動するときには木の枝で、上空から見ても馬体や兵隊が見えないように偽装し、まるで灌木の群れが動いているようだった。樹木の少ない中国では、この偽装用の木の枝を得ることも一つの難行であった。

師団は作戰計画にもとづいて衡陽を迂回し、その南の来陽付近に進出して粵漢鉄道を遮断した。しかし衡陽は予定どおり陥落せず、衡陽救援のために北上した敵と、衡陽を脱出して南下した敵の大軍に包囲されてしまった。補給皆無のため弾薬は欠乏し、行李の所有する予備弾薬は赤筒を残すのみとなった。そのために来襲した敵を撃退出来ず、全滅する小隊や分哨が続出した。

山の上の分哨に出ていたが、敵からの飛弾で頭を上げることも出来ない。弾の切れ目でそっと顔を上げて、衡陽の方角を見ると灰色の虹がかかっている。しかしそれは虹ではなく、衡陽の敵陣に撃ちこむ重砲の弾道であった。昼夜を分かたず銃砲撃を受けたが、敵の姿を認めざる限り撃ってはならぬと敵命されていた。

長い攻防戦であったが、八月に入ると衡陽の陥落が

近づいたのか、敵の退いていく気配が感ぜられ、撃ちかけて来る銃声も少なくなつた。その夜、犬の鳴き声があちこちに激しく聞こえていたが、夜が明けるとすっかり静かになり、敵の動く気配が感ぜられなかつた。

衡陽攻略戦は六月二十八日に開始され八月八日に陥落したが、四十日余の長い攻防であり、我が方の損害も大きかつた。退路遮断の、我が歩兵第百十六連隊も敵の重囲の中に、弾薬、糧秣の欠乏により、大きな犠牲を強いられたのだった。

私たちの分隊は出発時十二名であったが、半数の六名となつていた。戦闘部隊ではなかつたので戦死傷者ではなく、病気による脱落であったが、暑い中での長期行動と糧秣補給の皆無がその原因であった。こうして兵員は減少してその人員を充たしなければならなかつた。

師団は第三師団（幸兵团）と交替して松柏付近に移動した。松柏には大きな鉛の精錬所があつたが、敵がこれを破壊する前に我が軍が奇襲により占領した。私

たち大隊行李は此処の従業員宿舎に入ったが、この建物は今までに見た中国の建物としては、明るくてきれいで近代的な感じであった。精錬所には天をつくように高くて大きな煙突が立っていた。敵機はこの工場を爆破するため、この煙突を目標にいく度も来襲した。煙突にはなかなか命中しなかったが、その度に私たちは肝を冷やした。その為に一日にして此処から移動することになった。

その翌日、白昼敵機来襲の合間を見て出発した。夏の太陽はじりじりと焼け付くように照りつけている。草むした原野に來ると、墓である土饅頭が無数に並んでいる。今日は十三日でお盆の墓参りの日だと思ふと、遠い故郷の墓参りの風景が私の胸の中を風のようによぎった。

午後四時ころ三辺橋という小さな部落に到着し、ここで二週間ほどの休養となり、全力をつくして補給が行われたが、弾薬が主で被服や糧秣の調味料などは、文字ど通りの雀の涙程度だったが、現在の輸送状態では止むを得ないものであった。

三辺橋での休養期間は十日程の短いものであったが、この頃は端境期であり、また大軍で取り尽くしたためか、徴発に出ても部落の家々には米はなかった。さいわい田には稲が稔っていたので稲刈りをしたが、こうしたことは今までの作戦では余り無かったことである。また、溜池の水を干して魚を獲ったり、文字どりの自給自足であったが、二十代の若い身体は疲労衰弱の回復も速かった。

作戦第二段の桂林への進撃が発令されて、八月二十五日の日没を待って出発した。この辺りは山というより小高い丘がつづいて赤松の木が多く、草は膝の上まで繁っている。飛行機の遮蔽には好都合であったが、坂の上り下りが多く、道なきところを進む駄馬隊には難所である。第十三師団は、いつも山地や難路悪路等、地形の悪い所に多く使用されて来たが、これも野戦の作戦軍としての編成目的による宿命であった。

鏡部隊、第十三師団は昭和十二年九月特設師団として新設され、上海戦線に投入されたが、今日まで七年、十余回の大作戦に参加している。いつも条件の悪い地

形に使用され、また警備についても、常に敵地に接するところで、極めて損な役割を担わせられて来たのである。

地形の悪いところの行軍では、背のうの重さが身にこたえた。背のうの後に下げた鉄帽の重量が大きい。このころには鉄帽を捨てて持っているものは少なかつた。こうして行動が長くなると被服等の員数や、兵器の破損、紛失、消耗は当然であり、命の員数さえとぶのだという観念が先行するのも無理がない。私は鉄帽を捨てることに決めた。夜間、小休止のとき背のうから外してそっと草の中に押し入れた。何か後暗いものが感じられたが、己の体力を思うとこれも仕方ないことであり、大部分のものがこうしたのだと、我が胸にいいきかせるように大きく息を吸った。

洪橋会戦のために急進撃となり、戦鬪部隊たる本隊は急行軍で先行したので、連隊の駄馬隊は一九となつてその後を追及することとなり、昼夜にわたり行進をつづけて湘桂公路に出た。ここには洪橋に進撃する各部隊が入り交じる程に充満していた。敵の飛行機を避

けるために昼は公路外を、夜は公路を進んだがはるかな夜の夜空に光る南十字星を見ると、部隊は南へ南へと進むのが判る。

ようやく洪橋に到着したが本隊はすでに祁陽に向かつて進んでいた。一息つくいとまもなく更に追及の強行軍である。曆の上では秋に変わったばかりであるが陽差しは真夏で、強い太陽の光を浴びての強行軍は苦しく、背のうと背中の中に手を差し入れると、焼け付くように熱かった。このあたりの緯度は沖繩くらいで南国である。

南国の空は晴れて美しかったが、昼夜を分かたぬ連日の強行軍で、部隊が少し止まると立ったまま眠り、小休止になると僅かな時間でも泥のように眠った。出発となり起こされて、反対の方向に向かって歩き出す者もあった。

九月六日、夜の明けきらぬ早朝に、湘江を徒渉渡河することになった。昼は暑いが大陸性の気候は温度差が大きく明け方近くは寒い。水の中に入ると思うと身震いがした。川の中に立てた竹竿にそって渡るのであ

るが、それを外れると深みであるから、注意するように伝えられた。浅瀬ぞいに渡るので徒渉路は曲がり、対岸までは直線の倍以上もあるかと思われる。私たちの部隊が渡り始めるころは東の空が白み始めて来た。夜が明けると敵機が来襲するので、夜明け前に渡河を終わらなければならぬので気が急かされた。

水の中に足を入れると、たちまち編上靴に水が入って冷たかった。立てられた竹竿にそって進んだが、徐々に深くなりも中間まである。小形の支那馬は腹の半ばまで浸り、流されそうになるのを手綱をしっかりと握り、流されまいと必死にこらえている者もあった。

私たちは渡り終わると土手の木陰や物陰にかくれて、全員渡河の終わるのを待った。水面はもう大分白くなっている。全部隊が渡河が終わったときは、太陽は東の空に大分高く昇っていたが、敵機が来なかったのは幸運であった。部隊は堤防上を一キロ程進んで軍公路上に出たが、その道路の両側には家屋が並んだ街だった。ここは沙准橋である。部隊はここで「大休止

一時間」を告げられ街並の家々に入った。先ず駄馬の積載品の却下、脱鞍、飼付と馬の始末がいつも先決である。それから濡れた巻脚絆を解いてそれを広げ、編上靴を脱いで乾いた手拭で中を拭き取って再び履き、飯盒の冷たい飯を食べ終わるとようやく時間の余裕が出る。

私は部屋の隅に腰を下ろしてももの半ばまで濡れた足を投げ出して、土煉瓦の壁によりかかっていると、ついうとうとと眠り出した。

このとき、飛行機のキーンという爆音に目が覚めた。つづいて投下した爆弾が一発爆発したので、私はすぐ表に飛び出した。飛行機は上空をぐるぐる廻っている。つづいて二発目が爆発したので、私は恐怖心から転げるように隣の家に飛び込み、土間の中央に居た。と同時に三発目が爆発し、家は大きく波打つように揺れたので、はっとして背筋に冷たいものが走ったと思う瞬間倒壊した。

私は落下した屋根の下敷きとなり、真っ暗な中に濛々たる埃が立ちこめて、呼吸も困難で窒息しそうで

ある。屋根が上に覆い被さり重さに押しつぶされそうである。頭の上からは生暖かい血がだらだら流れ出している。私はもうこれが最後と思った。長時間苦しさで堪えていたように感じたが、実際は僅かな時間であつたであらう。埃が少し薄くなり呼吸が少しずつ楽になつて来た。私は地面についた両手と頭に力をこめて上に持ち上げると、屋根の広木舞がメリメリと折れ、瓦を押し除けて頭が出た。さらに肩を左右にゆすりながら膝で立ち上がると、上半身が上に脱け出た。空にはまだ敵機が舞っているの、すぐ裏の垣根になつてゐる木の中に走り込むと、その狭く低い木の下に大勢が退避していた。

私は無我夢中の放心状態だったが、飛行機が去るとようやく我に返り、助かつたのだと思つた。頭上には縦に六センチ余の裂傷と右手甲は打撲により、真ん中の筋が指の大きさに大きくふくれ上がつてゐたが、間もなく全体がお供餅のように腫れ上がり、痛くて下げられない。私は重傷を負つたが一命を失わなかつた。

私は衛生兵の治療をうけた。衛生兵は頭の傷を見て、「縫わなければならないが、軍医がないのでどうにもならない」と困惑の様子だった。本部の二人の軍医は本隊に同行して不在である。衛生兵は頭の傷に薬を塗つて三角巾で吊すと私は負傷兵の姿である。その上、帯剣装具等一切、崩れた土煉瓦の下敷きとなり、これも掘り出すことも出来ずにすべてを失い、着のみ着のままとなつた。頭を包帯に包み、右手を首に吊り、丸腰の姿はまさに敗残兵の姿であり、先行の自信をすっかり失つてしまつた。

編上靴は一旦脱いでまた履いたが、もしあのとき、脱いだまま履かなかつたら、裸足の敗残兵そのものの姿だつた。しかし私は最初の家の壁際から逃げ出したから、崩れた土煉瓦の下敷きにならなくて助かつたが、逃げ出さずに下敷きになつたものは一命を失つてしまつた。運、不運は紙一重のものと思つた。

飛行機が去ると、土煉瓦の下敷きになつたものを掘り出す作業が開始されたが、用具も少なく、崩れた土煉瓦がうず高くて難作業である。また時々敵機が来襲

するのではかどらなかつた。掘り出されて気絶して、息を吹き返した者も二、三人あつたが、結局、獣医官ら五名の犠牲者と、数頭の馬を失つてしまつた。思えば夢のような出来事である。

戦場ではこれが常のことである筈だが、つい先刻まで元気で笑つたり話し合つていた戦友がこの姿に変わり果てている。その姿に私は己のふりを忘れて、ただただ茫然とするのみだつた。

救出作業が一段落すると、ここに止まつていては危険なので郊外の部落で宿営し、夜の明けぬうちに出発した。次の目標は祁陽、零陵でありさらに全県である。部落は祁陽も零陵も街に入らずに遠くを通過したが、少し大きな街は砲爆撃により廃墟と化し、補給のないままの大軍が進撃して行くので、畑も部落の家々の中もすべて取りつくされて目を覆うばかりに荒れ果て、まさに荒漠千里、悲風流れゆく情景で、軍靴に踏みにじられたその中に、すすきの穂が秋の風にやさしくゆれていた。

全県に到着したのは九月二十四日だつた。ここでよ

うやく本隊に合流したが、洪橋の戦闘で大隊長の戦死を知らされた。全県の街は砲爆撃により破壊され瓦礫の原で、まだいく個所も煙が立ち昇つていたが、それでも時折敵機が飛来し、止めを刺すように爆弾を投下するので近づくことは出来なかつた。

全県までは長い道程だつた。着のみのままの丸腰だつた私は全県に到着したときには、帯剣も装具もすっかり揃つて元の姿になつていた。しかしこれは私が員数をつけたものでもなく、また補給されたものでもない。歩兵は消耗が激しいといわれているが、戦死者や重傷患者の兵器装具等は、行李で梱包輸送するところがあるが、その使役に出た戦友が、その都度、四点、五点と都合してくれたものである。

部隊は次の桂林攻略の準備と休養のため全県の南の山中の古岑頭に向かつて三十日の日没を待つて出発した。山の草深い細道を辿つたがその道の付近には、四角で細長いアルミ色の焼夷弾のからが、敷きつめたように散乱している。この先長い道程、優勢な敵飛行機の来襲と補給の不能を思うと、夜明けのない暗闇夜の

中に突き進むような気がしてならなかった。

【解 説】

執筆者金子氏の所属、歩兵第百十六連隊は、第十三師団（鏡兵団＝第二師団管区）隷下で新潟県新発田連隊である。この大隊本部行李であるから輜重隊所属で湘桂作戦に参加されたわけである。

昭和十九年五月末の編成表によれば、

師団長 赤鹿 理中將

歩兵第六十五連隊長（会津若松） 伊藤義彦大佐

歩兵第一〇四連隊長（仙台） 海福三千雄大佐

歩兵第一一六連隊長（新発田） 大坪進大佐

第一大隊長 古賀春一大尉

第二大隊長 半田繁信大尉

第三大隊長 渡辺良雄大尉

山砲第十九連隊長 石浜 勲中佐

工兵連隊長 石川省三中佐

通信隊長 大園廣志大尉

輜重兵第十三連隊長 田原親雄中佐

筆者は「第十三師団はいつも条件の悪い地形に使用され、警備も常に敵地に接する所で、極めて損な役割を担わされてきた」と述べているが、当時支那派遣軍での戦闘専用軍は第十一軍（呂集團）で、その隷下師団中、第三（幸）、第十三（鏡）が戦闘師団といわれた部隊である。そのうち第三師団は野砲、第十三師団は山砲編成のため、同師団が山地で多く戦闘した次第であり、天間に届く最強師団であった。

次に文中にある来陽警備戦、洪橋会戦等につき記してみる。

洪橋は衡陽北西約五十キロの地点にあり、街道を北西進すれば、祁陽—零陵—全県—桂林まで約三百キロである。

公刊戦史によれば、歩兵第百十六連隊は七月三日から来陽を警備し、重慶軍の反攻をその都度撃破していたが、優秀な重慶軍は小水舖（来陽南南西十三キロ）付近のわが陣地を迂回包囲して攻撃して来た。そのためわが一中隊は遂に全員戦死し、また連隊本部も重慶軍の攻撃を受けた。連隊は弾薬欠乏し空輸による補給

をうけることもあったが、衡陽攻略までは此の地を確保したのである。八月七日師団命令により、第三師団歩兵第三十四連隊（静岡）とその守備を交替した。この間、連隊はまた第二大隊（半田大隊）で松柏、水口山（鉛鉱山）の歩兵第六十五連隊第一中隊を救援していた。

湘桂作戰正面の敵は第九戦区軍（長官薛岳）であり、衡陽等で撃破出来た二五個師の大半は第九戦区軍であった。しかし、来援軍の第六、四戦区軍は概ね健在であった。

八月二十一日軍の隸下兵団参謀会同が次のように開かれた。第十三師団の報告では、師団の戦力は八割、輜重は六割に減少である。輜重第十三連隊は配属中の独立輜重第五十四大隊を加え戦力六割、駄馬四百頭で能力三十二トンとある。歩兵第一一六連隊の将校損耗は三割である。師団の患者千三百三十名、補充を要する弾薬即時三割、特に擲弾筒、手榴弾は全面的に急需す。軍靴六割要更新、三割は修理せば一か月もつ、これは戦力に最も影響あり至急一万足補充。六千足補

修。衛生材料の保有三割、至急四トン補充と、軍に報告した。

この時、第十一軍に司令官は「今次殲滅作戰の成果の如何は、今後の零陵作戰、柳桂作戰に至大な影響を及ぼすのみならず、また宝慶方面よりする第六戦区の攻勢成立を許す結果となるものである。このため軍としては、当面する一六個師の捕捉撃滅を策し、特に一挙に徹底的成果を挙げるを企図して、作戰準備期間を延長してその周到を期し、就中戦力の充実を図った次第である。」と述べ、次のように結んでいる。

「今や、国家の情勢は正に三千年の歴史をも汚さんとし神州の国土を防衛し得るやの分岐点にあり。会戦の及ぼす影響の至大なるに思いを致し、敢えて各兵団の一層の奮起奮励を望んでやまざる次第である」。

〔同会同出席師団は、第十三、第四十（鯨）、第一百六（嵐）、第六十八（松）、第五十八（広）の各師団である。〕

八月二十七日の第十一軍攻勢部署図によれば、第十三師団は公路の南、茅桐橋を経て洪橋に向かっている。

また、洪橋、祁陽、零陵間は公路の南を進撃したが、九月二日朝、右突撃隊たる歩兵第一百六連隊の進路は予想以上悪く、特に駄馬隊の遲滞は実に五時間以上に達し、師団本体第一梯団は佇立して日中無駄に過ごす状況だったとある故、輜重隊の苦勞は大きかったと推察される。

九月四日、祁陽攻略、六日、零陵攻略、十三日、全県を独断占領。零陵、全県間が湖南、広西省の省境であり、師団は更に南西に進撃し柳州攻略をし、続いて貴州省に進撃したのである。